

学会ニュース

目次

・ 第31回大会について	1
・ 第31回大会共通論題テーマ設定について		
18世紀と「帝国」	長尾 伸一	2
・ グローバルな18世紀学？-日光東照宮とオペラ・セーリア	森 泰彦	3
・ 18世紀フランス、美食をめぐる「社交性」の推移	橋本 周子	7
・ 事務局より	11

第31回大会について

本年度の大会は、2009年6月20日（土）、21日（日）に、多摩美術大学の八王子キャンパス（東京都八王子市鎌水(やりみず)）で開かれます。開催校責任者は、小穴晶子会員です。詳細は同封いたしました大会プログラムまたは学会ホームページの「最新情報」(「第31回全国大会について」)をご覧ください。6名の会員が自由論題で発表され、また共通論題『帝国』（コーディネーターは長尾伸一会員）では5名の方がご報告くださいます。今回は、国際交流の一環として、韓国18世紀学会会長の鄭珉（Jung Min）氏、そして共通論題の発表者の一人として中国から清朝関係研究者の牛貫傑氏をお招きいたしました。また、「18世紀フランスバロックの巨匠J.Ph.ラモーをめぐって」と題されたコンサートも開かれます。多彩で充実した企画の用意された大会への多数の皆様参加をお待ちしております。

なお、昨年、一昨年にひきつづき、学会期間中に小さなお子様をお持ちの会員の皆様により参加しやすくなるように、託児料の半額を援助いたします。詳しくは大会プログラム(このプログラムは学会ホームページの「最新情報」にも掲載の予定です。)をご参照ください。また、昨年と同様に大会の円滑な運営と主催校の負担削減のため、会員の方からは500

円(但し学生会員は無料)、非会員の方からは1000円(大会関連資料の他に学会『年報』をお配りいたします)の参加費をいただきますが、何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

<

第31回大会共通論題テーマ設定について
18世紀と「帝国」

長尾伸一（名古屋大学）

18世紀啓蒙の文化圏はフランスを中心としながら、ヨーロッパ全域に広がっていた。それはさまざまな文化的、制度的枠組みに支えられていた。いまだに学術言語として使用されていたラテン語に加え、フランス語がラテン語に事実上代替する国際語として重きをなし、人的交流の手段となっていた。国家が設立したアカデミーから科学者団体やサロン、クラブなどの国際的ネットワークが発展し、編集者、出版業者も国境を越えて活躍していた。同時期の東アジアにおいても、小規模だが清朝、朝鮮王朝、日本、ヴェトナム、琉球王朝の間に、中国語を用いた儒者たちの交流圏が存在し、その中では同時期のヨーロッパの文化や学問や技術も議論されていたことが判明している。国民国家形成以前の18世紀の思想・文化は、このような国際的広がりの中でとらえるのが望ましいが、それぞれの地域に内在した研究が深化する中で、それはかならずしも容易ではない。今回の共通論題では「帝国」を一つのキー・ワードとして取り上げ、各国研究を超えた18世紀研究の枠組みを探求してみる。

啓蒙の文化圏は衰退した（西）ローマ帝国の普遍性とは異なった形で、知識人の新しい普遍性を確立しようとしたように見えるが、そればかりでなく、18世紀にはまだドイツ語圏を中心に、神聖ローマ帝国が存在していた。現在その役割は再評価されつつある。東方で18世紀に強大化するロシア帝国は東ローマ帝国の継承者をうたい、18世紀後半にはハプスブルク家のオーストリアとともに啓蒙文化の保護者となった。また18世紀のヨーロッパは諸国家が政治的、経済的、軍事的に競争し合った国民国家の揺籃期でもあった。比較的平穏だった東アジアの国際関係とは違い、プロイセン国家の勃興とオーストリアとの抗争、バルト海地域の支配をめぐる戦いとポーランド分割など、19世紀を予告する戦争が行われた。とくに世界を舞台に展開されたフランスとイギリスの対立は、後者による世界的な「植民地帝国」の確立と、アメリカの独立によるその再編、フランス王国の破綻と革命へと展開して、それぞれの国での国民意識の勃興を引き起こし、啓蒙の時代が終わりを告げることになる。その点では、西ヨーロッパにおける「18世紀」は、「帝国」をのりこえ、主権国家分立体制の確立へと進んだ世紀とも考えられる。だが他方で政治理念上では、それはいまだ機能を失っていなかった。

共通論題では18世紀の新旧さまざまな「普遍性」を体現する、現存した、あるいは夢想の「帝国」をめぐる諸問題を、現在の歴史学の研究成果をもとに確認し、それを共有する中で、18世紀を考察する総合的な視点を探っていく。具体的には、神聖ローマ帝国、ロシア帝国に東アジアの清朝を加え、ブリテンの事実上の世界帝国やフランスの表象の帝国と対比しながら議論する。

グローバルな 18 世紀学？-日光東照宮とオペラ・セーリア

森 泰彦(くらしき作陽大学)

「ほら、あれがバロックというものだよ」

昨年の大分の大会からほぼ1ヶ月後の7月、チェンバロを専攻しているという学生に向かって、目の前にある陽明門を指して、私は半ば冗談のように言った。非常勤で出講している学科の、恒例の合宿の最終日、連休で混雑する日光東照宮にて。

ところがこの発言は、相手というより、私自身のなかに、突如として深く広い反響を喚び起こしてしまい、そこで湧き起こってきた何者かを捉えようと、ごったがえす内部への「参拝」をやめ、周囲を歩き回ることにした。

大会で18世紀のオペラについて基調報告するという難題を抱えたときから、また大会で公式・非公式にいろいろな議論をしているなかで、目を追うごとに気になってきていた問題のひとつがあった。

18世紀のいわゆるオペラ・セーリアには（またフランスのトラジェディ・リリックにも）、明示的に、あるいは暗黙のうちに、現在の君主をその主人公になぞらえて、神のごとく讃美したものが少なくない。そのゆえに、かつては「（特にドイツ教養）市民階級の栄光の歴史」という文脈の中で、そうしたオペラはほとんど無視されるか、否定的に扱われるのが常だった。いわゆるオペラ・ブッフアが「進歩的なもの」としてかなり過剰に評価され、ドイツ語圏出身のグルックが「墮落したイタリア・オペラ」を改革した英雄と誇大に宣伝され、モーツァルト晩年の傑作《テイトの慈悲》が長らく否定的な評価をされてきたのもそのためである。

ドイツ教養市民のための、ドイツ教養市民による、ドイツ教養市民の西洋音楽史が批判されるなかで、当然ながらこうした「物語」は否定され、オペラ・セーリアは、むしろある意味でもっとも18世紀らしいものとして、本格的な研究の対象となって、すでにある程度の歳月が経過している。

しかし内容への理解を深めようとする、少なくとも私の場合に立ちふさがるのは、そうしたオペラがつくられたそもそもの目的である。当時の特定の君主への讃美というコンテクストを（単に知的にではなく）実感として「わかる」ことがひどく困難なのだ。具体的な君主の名があっても、舞台を伴わない声楽曲ならそれほど困らないにもかかわらず。そうしたオペラが原作に忠実

に上演される場に実際に立ち会ったとしたら、私はおそらく身の置き場に困るだろう（現在の「置き換え」演出の一部は、こうした理由からも実践されているはずだ）。

そんな時期に出会ったのが東照宮だった。往時ほどではないにしても今でも広大で、大小さまざまな建築、彫刻、絵画が膨大にあるこの空間は、その全体が「神君」徳川家康と家康に始まる徳川幕府の圧倒的なrepresentationそのものであり、今なお宗教施設として現役であるのだから、オペラ・セーリアとは異なって、「過去のもの」にはなっていないのだ。

東照宮はわれわれが18世紀のオペラを理解するための補助線のようなものにはならないだろうか、こういう君主の神格化と西洋の王権神授説のようなものは何か関係があるのだろうか、東照宮の建設とオペラの始まりがほぼ同時代なのは偶然なのだろうか。一度に大量の疑問が脳裡をよぎり、音楽史研究仲間と小一時間議論をしてもおさまらず、帰京後数冊の本を取り寄せて読む。

曾根原 理『神君家康の誕生-東照宮と権現様』吉川弘文館、2008年（歴史文化ライブラリー）は、家康が当時のコスモロジー（風水）を駆使して、秀吉を神の座から引きずり下ろし、静岡、江戸、富士山などを結ぶ入念な計算から、自らの墓所として日光を選んだ経緯を説明する。代々の徳川政権が安定してつづくためには、家康自身が神となる必要があった。そこでの天海やらさまざまな宗教・宗派の関係なども面白く、比叡山延暦寺を東に移したとの想定で上野の寛永寺が建立されたことにも興味を惹かれた。私の母校である東京芸術大学は、不忍池を琵琶湖に見立てた、かつてのその広大なる境内の一角に存在するからである。また寛永寺を根本的に弱体化させた明治政府が、なぜ家康を神のままに残したのかという新たな疑問も湧いてきた。家康自身が清和源氏系として天皇の血を引いていることを強調していることと考え併せると、為政者はつねに政権の正統性をさまざまなかたちで主張せざるをえないものなのだろうかとの感慨も浮かぶ。神格化は、圧倒的多数である被支配者を統治するための護身術でもあるのだろうか。権力は権威を必要とし、その際にはrepresentationは必要不可欠な何かなのかもしれない。

次に紐解いたのは、東照宮の祢宜・文庫長の高藤晴俊が書いた『日光東照宮の謎』（講談社現代新書 1996年）。圧巻は現存する5000を超える彫刻のイコノロジーともいべき部分で、そのすべてが「権現様が天下統一したおかげで平和な暮らしを享受できる」というメッセージを表現していると読み解くところ。著者の立場からすると、この解説は半ばしか「歴史的」ではなく、現在も通用するものであるはずだ。17・18世紀のある種のオペラの台本や音楽をこのように読み解けたらさぞ面白かろうなどと夢想してしまい、representationの装置としての共通点は少し明確になる。とはいえ、家康を本気で神と信じて日光を訪れる人は、実際には今どのくらい存在するのだろうか。

最後に読んだ3冊目は、宮元健次『日光東照宮隠された真実-三人の天才が演出した絢爛たる謎日本史の旅』（祥伝社黄金文庫 2002年）。見た目はちょっと怪しげだが、芸術学の専門家の著作。「造営にかかわった三人のプロデューサー、狩野探幽・南光坊天海、小堀遠州に光をあてるという、従来とは異なる切り口から、東照宮の謎と魅力に迫る」というこの本は、東照宮の造営が驚くべき人数と信じがたいほどの国家予算を費やした大事業だったことを明らかにする。

もっとも興奮を覚えたのは、実証困難ではあるらしいが、小堀遠州というキリシタン美術を学んだ人物が造営に加わっていたのではないかというトピック。たとえば陽明門のプロポーションは、明らかに西洋渡来の黄金分割に基づいているのだという。

同時代現象としてのオペラと歌舞伎、あるいは陽明門の「バロック性」などということは、真面目な議論から安易な俗説まで、これまでさまざまなかたちで話題となってきた。しかし、あくまでもここらへんの話についての「素人」としての考えだが（だから「エッセイ」というかたちでしか書かない）、たまたま東照宮を訪れる少し前に読んだ、日本史を一貫してグローバルな文脈から眺めた初の試み（宮地正人編『日本史』山川出版社 2008年-新版 世界各国史-）を踏まえて勝手に話を敷衍すれば、世界経済の動向として1600年ごろにかつてないほどの富と権力の集中がいくつかの地域に発生し、それらが従来の規模と質を凌駕したその象徴的表現を同時期に見出したという可能性がある。それどころか、小堀遠州などの例を見ると、たとえばヨーロッパと日本のrepresentationのあいだには、具体的なつながりがあった可能性も出てくる。「対抗宗教改革の時代」という関連はもちろんあるわけだし。

そんな話になると、文化史を切り捨てた政治史にも、政治史を切り捨てた文化史にも手に負えない話になってくる。近代的なナショナリズムや同じく近代的な「自律した芸術」論を過去にまで遡及させてきた結果、一国単位の歴史や自律した芸術の歴史が書かれ、実ははるか以前から、時代ごとの規模ではあれ、今で言うところの「国際交流」が想像をはるかに超えて盛んだったことは見逃されがちだったし、現実とのかかわりが深い芸術は、その部分を切り捨てて評価されるか、全体として軽視されるかということになりがちだった。しかしどうやら強大な権力は自身を維持するためにたえず「芸術」を必要とするようであり、そのことはその権力を理解するための不可欠な要素のように思えるし、創作者にとっても受容者にとっても、あるいは権力にとってもたえずどこか統御しきれないところが残る「芸術」の側も、権力を含むさまざまなものと複雑なネットワークでいつも結びつけられてきたとも思える。もちろん「芸術宗教」として自らある種の権力・制度となった近代の歴史も含めて（ナチス政権下のベルリン・フィルについての最近の研究にも見られるように、19世紀や20世紀は、「自律した芸術」を、そのようなものであるとされるぶんだけ一層うまく、政治的・商業的に利用した）。

また日本が不幸な戦争とさらに不幸な戦後処理をやった（あるいはやらなかった）結果、日本の研究者は隣国の同業者と情報交換することすら容易でなかった。大分の大会での耶馬溪の議論にしても、最近の日本音楽学会での近代洋楽史の議論にしても、私たちはようやくそのような議論が遅ればせながら可能になった地点におり、そのことは今後さらに多くの地域との交流や議論につながる可能性があるし、私たちは、長らく「特殊日本的」と思い込んできた、あるいは思い込まされてきたことが、多くの場合、実はさほど珍しい事例ではないことに気付きつつある。

私自身の数少ない体験からすると、18世紀学会全国大会での話題は西洋の話が中心にあり、日本や中国を含む東洋の話題は、「たまたま同じ18世紀」という添え物のような気がするのが実感だった。しかしいわゆる「鎖国」の時代にあっても、東洋の島国の政治や経済は周辺地域というコンテクストを離れては存在しえず、周辺地域もまた全世界的な動向と無縁ではありえなかったわけで、いきなり飛躍するみたいだが、学問や芸術にしても同じようなことがあったと考えるほうが自然なのではないだろうか。

1791年にウィーンで初演された、エマヌエル・シカネーダー台本、モーツァルト音楽の《魔笛》の第1幕冒頭のト書きには、王子タミーノが「javanisch」の狩衣を着て登場するとある。この単語が「ジャワ」のつもりなのか「日本」のつもりなのか、はてまた単に遠い異国という意味しかないのかは不明だが、やがてはこの箇所への注釈がもっと広い分脈で可能になる日がくるかもしれない。このような場合、これまではもっぱらヨーロッパのアジア理解についてしか語られなかったのだが、実は、その反対の視点も、あるいは東洋でもヨーロッパでもないさらに別の位置からの視点もありうるからである。なにしろ今は、クラシック音楽産業が生き残りをかけて、中国・南米・アラブ諸国に熱い視線を向けている時代なのでもあるし。

18世紀フランス、美食をめぐる「社交性」の推移

橋本周子（京都大学）

現代社会においてフランスが世界に誇る「美食」を考えたとき、我々の脳裏に浮かぶのは、一つの芸術的作品として飾られた一連の料理だけではない。フランス人の友人に食事に招かれた人なら誰でも、そこで繰り広げられる人間関係の、見事な、としかいいようのない紐帯に目をみはるはずである。例えばアペリティフという習慣。胃袋の比較的小さなわれわれ日本人には、ときには2時間近くにおよぶこの前奏のあいだに口にする酒肴だけでもう満腹になってしまいそうだ。しかし、ここで彼らが楽しんでいるのは、酒でも酒肴でもなく、むしろ互いの友情を確かめ合い

ながら楽しむ会話ではないだろうか。ここでは味覚の楽しみと会話の楽しみの幸福な取り合わせは、どのような変遷を辿って現代に至るのかを辿ってみようと思う。

このような親密さと美食の密接な関係の系譜を辿れば、その端緒は18世紀初頭のオルレアン公フィリップの食卓に確認される。1715年にルイ15世の摂政となった彼は、自ら料理を行うほど食の楽しみを愛した。彼はヴェルサイユよりもパリを好み、住居であったパレ・ロワイヤルでは頻繁にsouper（「夜食会」）を開催し、親密さのうちに愉快的ひとときを過ごしたとされる。摂政時代に発展したこの食事形態は明らかにそれ以前、例えばルイ14世のもとで行われた盛大で荘厳な雰囲気の中で催される大饗宴とは異なる性格を持つものであって、それは18世紀を通して典型的な食事形態となるロココ式のsouper intime（「親密な夜食会」）の初期モデルを示すものであった¹。

オルレアン公フィリップが料理に目覚める契機を与えたともいわれる当時の著名な料理人であるマシアロの時代には、料理の手法に関しても大きな革新が起こっている。中世の料理法では、高価であるがゆえに財力を誇示する道具の一つであった香辛料が大量に用いられ、また料理にかける時間が長ければ長いほど、その手間の代価として料理の価値も上がるという通念があった。そのため料理が完成し、食卓に具される頃にはもはや素材は原型をとどめず、また熱い料理も冷めてしまっているのが常であった。摂政時代にはこれら中世の伝統的な料理法は廃れ、先に示したような（以前よりは）簡素であるものの、優雅・繊細で節度の保たれた料理が確立する。そしてこうした新しい宮廷の食の形態は、18世紀を通じて徐々に貴族、上層ブルジョワジーの間へと浸透していく。1750年にはフランソワ・マランが自らの料理書にこう記している。「大貴族を真似たがる多くのブルジョワは、自分たちの身分をわきまえず、食卓を高価な料理で埋め尽くす」。しかし同じ18世紀中頃には、貴族の食生活にあこがれ、それを真似ようとするブルジョワがいた一方で、貴族の間ではブルジョワ式の食生活が流行していたことも確認されている²。そして世紀の終わり頃には、ブルジョワのうちでも最も裕福であったとされる徴税請負人の食卓において、このような食事は一つの極みに達する。それを明確にしているのが、グリモ・ド・ラ・レニエール（1758-1837）の食事会であった。

グリモの催した食事会は、食材・調理法・プレゼンテーションのいずれにおいても徹底的に美学的趣味を追求したものであった。このようなグリモの美食観は、それを記述する彼のエクリチュールにもはっきりと刻み込まれ、それゆえに彼の美食的言説は文学的な深みを備えたものであった。しかし注意しておかなければならないのは、グリモがリベルタンのともいえる身体の快樂

¹ バーバラ・ウィートン『味覚の歴史：フランスの食文化——中世から革命まで』辻美樹訳、大修館書店、1991年、244-245頁。

² バーバラ・ウィートン、前掲書、304-305頁。

を美食に求めたのは事実であるとしても、彼においてconvivialitéが完全に排除されているわけでは決してなく、それどころかconvivialitéはグリモの食事会においては非常に重要な要素であったということである。彼が18世紀後半に開催したとされる「哲学的昼食会」に関する記述は、食事会において、食を口実としての会話の楽しみがグリモにとって重要な意味を持ったことを明らかにしている。

アントワーヌ・リルチは *Le monde des salons : sociabilité et mondanité à Paris au XVIIIe siècle* (2005) で、18世紀における食の社交性の表象を構造化する二つの極として、豪華で精力的な「貴族的・金融家的食事le repas aristocratique ou financier」と、「哲学者の食事le repas de philosophes」を設定している³。前者は豪華で、富の誇示を主な目的とするのに対し、後者において共食性commensalitéは知的交換の口実あるいはメタファーにすぎないと彼はいう。グリモの「哲学者昼食会」は、その名称だけをみればむしろ後者の「哲学者の食事」に近いとも思われるけれども、この「哲学者昼食会」が後には「食審委員会」という、美食の判定に特化した集まりへと変貌を遂げていくこと、そこで徴税請負人であった父の財産を費やしてパリ中の高価な料理が楽しまれたという史実に鑑みれば、グリモの食事会は、まさにリルチの示す二つの極の性質を同時に併せ持つような集まりであったと考えることが可能である。

このように、宮廷における「親密な夜食会」は、オルレアン公フィリップのもとでその絶頂を迎え、その後のルイ16世の時代には早くも衰退のかげりを見せることになるものの、この伝統は貴族たちや、グリモの両親に代表される徴税請負人たちによって受け継がれた⁴。こうして宮廷から貴族を経て、上層のブルジョワのもので持続的な発展を続けた食をめぐっての社交の楽しみは、しかし、フランス革命という衝撃によって挫折させられることになる。革命の前後を生き、この美食の風景の変化を目の当たりにしたグリモは、革命によって失われたかつての「サロンの」な食事における楽しみを回顧する。

再度確認すれば、グリモが実践しようとした美食に、ときに他者との関わりをすべて断って耽溺すべきリベルタンの快樂を希求する側面があったことは確かだ。だがそれでもやはり、すでに触れた通りグリモにおける美食はsociabilitéを含むものであったこと、そして何より彼が憧憬を抱く摂政時代の美食はsociabilité抜きには語れない性質のものであったことから、彼がフランス革命によって失ったと考えたものは、その両方が融合した全体であったと考えても行き過ぎではないだろう。そして彼は革命によって突然富を得ることになった人々、すなわち「新興成金 nouveaux riches」の食の場面への登場によって、18世紀を通じて守られた食卓の礼儀や秩序が崩

³ Antoine Lilti, *Le monde des salons : sociabilité et mondanité à Paris au XVIIIe siècle*, Fayard : Paris, 2005, p.231

⁴ グリモ『招客必携』

壊したことを嘆いている。革命期における食事の実態については、グリモ以外にも様々な人々が証言をしているが、それらはいずれも、民衆に開かれたがゆえに、その代償として秩序をなくした美食の風景であった。

このように18世紀から19世紀初頭に至る食事の場面における sociabilité の推移を追ってみたとき、例えばグリモが摂政時代の食事を回顧しそれに憧憬を抱く様は、18世紀末にサロンの会話の楽しみを知った最後の世代の人々が、革命、とくに恐怖政治のあとの現実に対して幻滅し、サロンを懐かしむ姿を思い出させる。富永茂樹は、18世紀のサロンという社交の空間において会話が世論形成に対して果たした重要な役割を強調した上で、その後革命期に入って会話にとってかわった無秩序で暴力的でさえある議論 *débat* が、18世紀サロンの会話の楽しみを知る人々に対して幻滅を与え、彼らが過去の楽しみに憧憬を抱くようになる過程を鮮やかに示している⁵。

富永がここで明らかにした軌跡（18世紀のサロンにおける「会話」の楽しみ→革命期のクラブや民衆協会における「議論」の悪夢→反動としてかつての会話を憧憬）は、確かに18世紀の *souper intime* が革命期の無秩序で情趣のない食卓の風景へと推移し、摂政時代へのグリモの憧憬を誘ったという過程に完全に軌を一にするものではないし、両者は性質についてもまったく同じであるわけではない。だが、サロンにおける食事会の楽しみを知る世代に属する人々が、旧体制末期の食事会に憧憬を抱いたことはやはり示唆的であり、その際、彼らが失われたと感じたのは、料理技術では決してなく（それはむしろ革命後には進化したといえる）、「社交性」を核とする食事の楽しみであったという点では共通性がある。18世紀の *souper intime* を知る人々が嫌悪を抱いたのは、すでに述べた新興のブルジョワジーと貴族の入り交じる社交界で行われた情趣なき美食行為であり、それは革命期から帝政時代を経てますます発展していこうとしていた。そしてさらには、18世紀にはみられることのなかったレストランという新たな食の舞台における光景もこのような傾向に対して大きな影響力を持つことになる。

さてここで、フランス美食文化を代表するもう一人の18世紀人、ブリヤ＝サヴァランに登場願おう。改めて説明するまでもなく、彼は『味覚の生理学 *Physiologie du goût*』（邦題『美味礼讃』関根秀雄、戸部松美訳）を1825年に著し、現代に至るまでその著作は再版され続けている。そんな彼が同時代の忌むべき食風景として非難するのは、やはり秩序や情趣に欠けた食べ方であって、それはレストランの誕生とともに現れたものである。

革命期以降に表れた食の光景に嫌悪を示す一方で、ブリヤ＝サヴァランはむしろ明らかに18世紀的な社交の喜びの延長線上にあるような食事の楽しみを念頭に置いている。つまり、その喜びとは、食事その全体の一部であったようなサロンにおいて展開された、会話の楽しみを中心と

⁵ 富永茂樹、第三章「会話と議論——十八世紀後半のフランスにおける社交の衰退」、『理性の使用——ひとはいかにして市民となるのか』みすず書房、2005年。

するような喜びである。事実、『味覚の生理学』を仔細に読み解けば、サロンとの共通性をはっきりと読み取ることができる。

そして、ブリヤ＝サヴァランが今日まで読み継がれているのは、『味覚の生理学』に含まれる美食に関わる社会的考察が、時代を越えて通用するものであることに由来している。彼の著作は、その題名が示すように、当時の生理学や化学の知識をふんだんに盛り込んだ内容となっているが、現代実際に読まれ引用されるのは、ほとんど作品冒頭の「アフォリズム」だけである。そしてそこに示される教えは、どれも会食者との共食を前提としているのである。

フランスの食文化史を語る際には、しばしば現代に繋がる美食文化はフランス革命後のレストランの誕生に端を発するとされ、あたかも革命という一線を画して美食のあり方のすべてが変わってしまったかのようにいわれる。しかし、ブリヤ＝サヴァランの美食観には18世紀サロンを直接に受け継ぐ「社交性」が確認されること、そして彼の美食観（とりわけ社交性に関連する考察）が当時以降今日に至るまで、時代を越えて受け入れられ続けているということを併せて考えたとき、われわれの時代のフランス美食における「社交性」のルーツは、他にもない18世紀にあるとすることができるのではないだろうか。

事務局より

日本学士院賞受賞のお知らせ

元代表幹事の安藤隆穂会員がこの度日本学士院賞を受賞されました。授賞理由は以下のとおりです。

研究題目：『フランス自由主義の成立—公共圏の思想史』

授賞理由：大革命を控えたフランス社会には、それを近代化しようとする様々な思想がありましたが、安藤隆穂氏は著書『フランス自由主義の成立—公共圏の思想史』（名古屋大学出版会、2007年2月）において、その様々な思想の中でアダム・スミスの二つの主著すなわち『道徳感情論』と『国富論』が、同時に一体として受容されていたことに注目しました。分業と相互同感によって統合される自由な小生産者の社会としてのスミスの文明社会は、受容の過程で、一方では教育論や奴隷論などによって社会的内容が豊かになり、他方ではイギリスから言論の自由、ドイツから感情的接触という二つの個人統合の原理を学びとって、生活中心の小市民自由主義というフランス特有の自由主義思想を生み、底流として今日に至ると安藤氏は論じています。

このようなフランス自由主義の性格規定は、同氏の国際的な視野と学際的な研究方法と緻密な文献考証によって初めて可能になったものであり、本国フランスにも例を見ない、日本から国際的に発信すべき近代社会思想史研究の成果です。

（日本学士院ホームページ「日本学士院賞授賞の決定について」より）

学会ニュース59号についてのお詫びと修正

本年1月にお送りいたしました学会ニュース59号において、事務局の手違いにより南大路振一会員と大西洋一会員を誤って退会者としてご案内いたしました。ここに両会員にお詫び申し上げますとともに、訂正いたします。

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、ホームページ「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、新年度の会費払い込み用紙を同封させていただきます。本年度までの会費未納入の方へは、滞納年数に応じた金額のものを同封しております。前回、前々回の学会ニュース他でもお知らせいたしましたが、会費の納付率が相変わらず極めて悪い状況です。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくご願いいいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一(常任幹事・年報担当)、井田尚(常任幹事)、伊東貴之(常任幹事)、岩佐愛(常任幹事、年報・書評担当)、王寺賢太、小田部胤久(代表幹事)、笠原賢介(常任幹事、会計担当)、金沢美知子(常任幹事)、川島慶子、小穴晶子(常任幹事、年報・業績覧担当)、高橋博巳(東アジア交流担当)、寺田元一、長尾伸一、中山智子、馬場朗(常任幹事、庶務・学会ニュース担当)、堀田誠三、増田真(国際幹事)

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏